

オンライン授業におけるインタビュー調査プロジェクトの実践 —上級レベル日本語口頭表現クラスでの試み—

鹿嶋 恵

要旨

本稿では、2020年度後期に同期型オンライン授業として実施した日本語科目「上級口頭表現」について、その中で行われたインタビュー調査プロジェクトに焦点を当て、その実践概要を報告した。このプロジェクトのオンライン発表会の実施後に行った振り返りアンケートの結果から、本プロジェクトでの学習内容について、学生たちは有益性を感じ、またテーマに対する問題意識／考え方の深まりを認識できていたことを示した。このことから、オンライン授業において、インタビュー調査やプレゼンテーション等のインタラクティブな活動を取り入れることには意義があること、特にそこで生じる他者や他のコミュニティとのやり取りは、口頭表現能力の向上のみならず、思考や認識にも深い影響を与えていることを示した。

キーワード

オンライン授業、インタビュー調査、口頭発表、インタラクション、上級

1. はじめに

筆者はこれまで、大学入学前に口頭発表を経験したことのない留学生や、日本語能力試験のN1レベルに合格しても口頭表現能力が低いままの留学生に数多く出会ってきた。そのような学生への授業実践として、目標言語である日本語の言語的知識の教育だけでなく、それを用いる運用能力を、他者とのやり取りや他のコミュニティとの関わりの中で身につけていくことを目指してきた。特に、専門分野の学習や研究に入る一歩手前の段階として、社会問題を学習内容のテーマとして取り上げ、単に記憶や理解で終わるのではなく、比較や分析の経験を通してより深い思考や学びへとつなげることを目指してきた。

しかし、コロナ禍に見舞われた2020年度、状況は一変した。大学などの多くの教育現場ではオンライン授業へと移行し、対面授業という学びの場を失った。筆者の周囲では、オンライン授業では技術も手段も限られ、他者との双方向的なやり取りは難しく、諦めざるを得ないという声も多々聞かれた。さらに、学生の学修意欲の低下やメンタルケアの必要性も問題となっていた⁽¹⁾。だが、このような状況下であっても、口頭表現能力の向上のためには、学習者が他者や他のコミュニティとの関わりの中で学び続けることは不可欠なはずと筆者は考え、対面に代わる新たな手段や可能性を探り続けた。

以下、本稿では、2020年度後期に開講した日本語科目「上級口頭表現」での実践において、同期型オンライン形態で実施したインタビュー調査およびその口頭発表の取り組み（以下「インタビュー調査プロジェクト」）に焦点を当て、その概要や発表会の状況を報告する。また、発表会実施後に行った振り返りアンケートから、その有益性を検討する。

2. 授業の概要

この授業は全15回（1コマ90分×15週）の教養履修科目（初修外国語科目）である。日本語習得レベルは上級で、おおむね日本語能力試験N1合格者を対象としている。

受講生は、通常の学期では基本、単位認定の必要な学生を対象とする。だが2020年度後期はコロナ禍で短期留学プログラム生の受け入れがなかったため、単位認定の不要な学生も受け入れた。学部正規生3名に加え、学部研究生1名、大学院生1名、大学院研究生3名、計8名である。専門分野の内訳は文系・理系各4名である。この中には入国制限で渡日が遅れ、第11回の授業まで空港近くのホテルに待機・受講した者も複数いた。

授業の言語領域的な目標／目的は、論理的で説得力のあるスピーチ・発表ができるようになること、また、論拠を示しながら構成の明確な口頭発表ができるようになることである。

授業形態については、以前は筆者が対面で行っていたが（2018～2019年度）、コロナ禍を受けて2020年度前期からはほぼオンラインとなり、2020年度後期は結果的に15回の授業すべてがオンラインとなった。具体的には、授業はWeb会議システム（Zoom Meeting）で行い、連絡や課題のやり取りは本学の学習運営システムLMS（Moodle）を通じて行った。

全15回のコースには、大きく4タイプの口頭発表を学習活動としてデザインしている。

- a) 自分の意見を論理的に話すスピーチ活動
- b) 資料を比較して情報を読み取り、その結果を口頭発表する活動
- c) インタビュー調査を計画・実施し、その結果を口頭発表する活動
- d) グループでプランを作成して口頭発表する活動

上記 a)～c)は個人課題、d)はグループ課題である。特に b)の課題で比較対象とした資料には、文書資料と、自ら集めた情報の2種を設定した。

コース全体の流れとしては、自身の経験や知識に基づくスピーチから始まり、徐々にデータに基づいた発表へと促している。この流れの中で、客観性／論理性／構成の明確さ等の重要さに気づかせ、意識づけることを目指している。具体的には、次頁の表1のようなテーマと内容にて授業を実施した（表内の「学習活動」は上記の a)～d)を示す）。

3. インタビュー調査プロジェクトの概要

ここでは、表1のコース第9回～第12回「大学生の意見を調査・発表してみよう(1)～(4)」での実践に焦点を当て、同期型オンライン形態で行われた「インタビュー調査プロジェクト」について報告する。授業内容の概略と課題等については、次頁の表2の通りである。授業の教材や課題類は、基本的に Moodle に事前公開とし、予めダウンロードして目を通しておくことを前提とした。以下、本プロジェクトの概要について、1)テーマの導入、2) インタビュー調査の進め方、3) インタビュー調査の実施方法、4) インタビュー調査の結果の発表方法、5) 発表資料の作成方法、の順に報告する。

3.1 テーマの導入

本プロジェクトでは、クラス全体で1つの大きな共有テーマを設け、その共有テーマの下に各自の興味・関心に応じてインタビュー調査のテーマを設定させている。これには次

表 1 授業のテーマと主な内容授業

回	授業のテーマ	内容の概略	学習活動
第 1～3 回	ガイダンス ウォーミング・アップ 論理的なスピーチをして みよう(1)～(3)	口頭発表の基礎知識やルールを学ぶ。 課題のテーマについて、論理的なスピーチをする練習を行う。	a)
第 4～5 回	比較して発表してみよう (1)～(2)	文書資料の内容を複数の視点から比較 分析し、口頭発表する。	b)
第 6～8 回	情報を読み取って発表し てみよう(1)～(3)	資料(食品表示)から情報を読み取 り、検討、整理、発表資料の作成、口 頭発表を行う。	b)
第 9～12 回	大学生の意見を調査・発 表してみよう(1)～(4)	インタビュー調査の計画、調査票作 成、調査の実施、文字化作業、資料整 理・分析、発表資料の作成、口頭発表 を行う。	c)
第 13～ 15 回	プランを考えて発表しよ う(1)～(3) これまでの学習のまとめ	ある課題についてグループごとにプ ランを考え、検討、整理、発表資料の作 成、口頭発表を行う。	d)

表 2 授業内容の概略と課題等

回	授業内容の概略	課題・提出物
9	・テーマの導入 ・インタビュー調査計画の作成方法の解説 ・インタビュー質問項目の作成方法の解説	・ワークシート(「インタビュー調査計 画」「インタビュー質問項目」)に記入 して提出
10	・課題の「調査計画」「質問項目」について クラスで検討 ・インタビューの文字化方法の説明 ・発表資料としてのスライド作成と、発表 原稿の作成について解説 ・インタビュー結果を発表時に使う引用表 現、パラフレーズ表現の解説	・インタビューの実施 ・音声資料の文字化作業 ・音声資料・文字化資料の分析 ・録音音声の一時保管(録音許可が得 られた場合のみ)
11	・インタビュー調査の結果の整理 ・スライドの作成、発表原稿の準備	・文字化資料のファイルの提出 ・添削希望者は発表原稿を提出
12	・インタビュー調査結果の口頭発表	・発表資料のファイル提出

の2つの目的がある。すなわち、クラス内での比較が可能になる点、また全体として多角的な視点から1つのテーマに迫ることが可能になる点である。

今回は、その共有テーマに『プラスチックとコロナ禍』を選定した。理由は、先行する学習内容を含め、持続可能な開発目標(SDGs)について発展的に学びを深めることができ

ると考えたためである。具体的には、第4回～第5回の授業では、ブランド品の販売戦略と在庫処分、衣料品の廃棄の問題を取り上げた。また、第6回～第8回では、食品表示の比較分析から食品ロスについて考える機会を設けた。緩やかな枠組みの中で、学生たちはSDGsについて複数の視点から考え始めていることが、個々の課題提出やその振り返りから見てとれた。プラスチック問題は決して新しい問題ではなく、筆者自身、これまでも何度か取り上げてきたテーマである。しかし、コロナ禍にあつてその重要性が軽視されている風潮を感じており、この問題を今改めて学生に問いかけてみることは意義があると考えた。

以下、多少長くなるが、このテーマに取り組むまでの動機付けの過程を報告しておく。

初回（第9回）の授業では、まず、海中に沈んでいる使い捨てマスクの新聞掲載写真⁽²⁾をZoomの画面で共有しながら、今後これがどうなると思うかを質問した。学生たちの反応に戸惑いを見てとったので、質問を変えて、このマスクの素材が何であるかを学生たちに問うと、「紙」「布」という答えが返ってきた。そこで、アイロンをかけて縮んだ不織布マスクを紹介し、いわゆる「不織布マスク」には「ポリエステル」という合成樹脂、すなわちプラスチックが含まれていることを説明した。

このような不織布マスクが海中に長期間あるとどうなると思うか、と再度問いかけたところ、プラスチックによる海洋汚染や動物への影響など、学生たちが知っていることを話し始めた。そこで、学生たちを2つのグループに分け（Zoomの機能の「ブレイクアウト・セッション」を利用）自由に話し合う機会を設けた。その結果をグループの代表者に発表してもらったところ、「マイクロ・プラスチック」の話には及ばなかったので教師から紹介した。すると、「知っている」「他の授業で学んだことがある」という学生が出てきたので、当人たちに説明をしてもらった。そして、そのようなマイクロ・プラスチックが海中に増えると、食物連鎖の過程で被害がどう拡大するかを全体で話し合った。

さらに、コロナ禍でプラスチック製品の使用量が増え、削減対策が阻まれている現状を導入した。関連する新聞記事⁽³⁾をZoomで画面共有し、一部音読しながら解説した。

最後に、共有テーマとして『プラスチックとコロナ禍』を提案した。学生たちは、レジ袋や、弁当容器など、個々に興味や関心を持つテーマを口に始めた。そこで、コロナ禍の下、今の日本人大学生はそれらの問題をどう考えているのか、実態はどうなっているのか、インタビュー調査を行ってみることを提案した。そして『プラスチックとコロナ禍』はあくまでも共有テーマであり、各自、自分の興味・関心に基づいて関連する具体的な事象を取り上げ、そこから独自の調査テーマを焦点化していくよう促した。

3.2 インタビュー調査の進め方

学生には、第9回の授業で共有テーマを導入後、インタビュー調査の進め方、それに伴う課題や作業予定を説明した。課題として、「インタビューの調査計画」と「インタビュー調査の質問項目」を考えてくることを課した（ワークシートへの記入後提出）。また、本プロジェクトでの評価内容と基準も示した。第10回の授業では、課題とした「インタビューの調査計画」と「インタビュー調査の質問項目」について、それぞれ学生1名ずつZoomの画面共有にて自分の作成したものを発表してもらい、全体で検討した。この2名を含め、早めに課題提出した4名には、教師から添削とコメントのフィードバックをMoodleにて行っている。クラスでの検討過程が、他の学生への参考や刺激になった様子

で、自分のテーマをさらに考え直すという学生も出てきた。また授業では、インタビュー調査とその発表を進めるために必要な基礎知識（文字化方法、スライド作成、発表原稿の作成、発表時の引用表現、パラフレーズ表現等）について解説・確認を行い、それをもって一旦終了とした。続けて、調査計画や質問内容について、Zoomでの個別相談を希望した人を対象に順次対応した。

第11回の授業は、各自での文字化作業やその整理・分析、発表資料の準備の時間とした。ただし、授業開始時にはZoomを開き、希望者からの質問や相談に応じた。質問項目を修正したので見てほしいという学生や、実際にインタビューを行ったが予想と違ったため発表ではどうまとめたらいいか等の相談があった。残りの学生に対しては、引き続きMoodleにて課題の添削やコメントのフィードバック、進捗状況の確認を行った。

3.3 インタビュー調査の実施方法

今回のインタビュー調査では、(いわゆる)日本人大学生を対象として、3名以上に実施することを目標にした。手段としては、以前は当然対面で実施していたが、今回は対面にこだわらず、Zoom、SNS、電話など、各自が利用しやすい方法とした。その実施日時は、授業外の時間である。

予想された問題は、インタビューを引き受けてくれる対象者（日本人大学生）である。コロナ禍で日本人学生と親しい関係を築けている留学生は決して多くない。また、渡日すらできていない学生もいた。そのため、本学の「オンライン日本語ラーニング・コモンズ」に協力を要請した⁽⁴⁾。学生には学期初めからこれへの参加を呼びかけ、本プロジェクトの開始に際してもさらに案内を繰り返した。

なお、インタビューの対象者の選定は学生の任意であり、「オンライン日本語ラーニング・コモンズ」に限定したものではない。

3.4 インタビュー調査の結果の発表方法

発表時間は、1人5分間、加えて質疑応答3分である。

発表形態は、大教室における対面形態、プロジェクターによる発表資料の投影を想定・準備していたが、後述のように直前にZoomによるオンライン発表会に切り替えた。

発表内容には、次の6項目を必ず含めるように指示した（①調査の背景（動機、予測）、②調査の目的、③調査の実施状況、④調査の結果、⑤考察、⑥まとめ）。これは調査発表を初めて行う学生にも発表の流れをイメージしてもらい、短い準備期間でも最低限の枠組みと内容を踏まえてもらうためである。またスライド構成の基本としても指導した。

3.5 発表資料の作成方法

発表資料のファイル（PowerPointファイル）は、5分間の発表時間に合わせてスライド12枚以内である。発表当日までの作成課題とし、午前9：00までにMoodleにアップロードすることとした。この提出は、機器類の不調等、不測の事態に備えるためである。その作成に際しては、具体的な方法を解説した上で次の2点に注意するよう指示した。

- i) 発表資料と発表原稿は別に作成し、授業で学習した作成方法に基づくこと。
- ii) 発表資料内に、動画、キャラクターは使用しないこと。

また、発表原稿の日本語表現の添削希望者は、発表日の3日前までにMoodleにアップロードすれば、教師が添削をして返却した。

4. オンライン発表会の実施状況

発表形態は、上述のように、発表日の直前まで大教室での対面形態と発表資料プロジェクター投影を想定・準備していた。オンライン授業が続いていたが、せめて最後の発表はとの思いが教師にあった。しかし、市内の新型コロナウイルス感染拡大を受けて、発表日の2日前に対面形態を断念し、Zoomによるオンライン発表会に切り替えることとなった。学生たちは直前の変更にも動揺することなく、柔軟に対応してくれた。それまでの口頭発表をいずれもZoomで行ってきたので、学生たちが手順に慣れていたことであろう。

発表会当日、学生たちには授業開始時にZoomとMoodleの両方の画面を開いておくように指示した。Zoomは発表会への参加用、Moodleは聞き手からの評価記入用である。この方法は、事前に実行可能なことを確認し、また第8回の授業においても経験済みである。学生それぞれのインターネット環境により、パソコン上で両方の画面を開いた人、スマートフォンでZoom画面・パソコン（タブレットを含む）でMoodle画面を開いた人の2パターンがあった。

発表者は全員、自分自身で発表資料をZoomの画面共有で提示し、自ら操作しながら発表を行った。場合によっては教師側から発表資料の画面共有を行うことを想定・準備していたが、今回は不要であった。司会進行は教師、タイムキーパーは学生が務めた。

聞き手からの評価は、以前は紙の評価票に記入し、回収後に集計していた。今回はMoodleの「アンケート」機能を利用することで、入力直後に参加者全員の閲覧と、発表者本人へのフィードバックが可能になった。評価内容の大枠は下記の6項目で、本プロジェクトの導入時に明示していたものである。

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1) 発表構成やスライド構成の明確さ | 4) 事実と意見を区別した話し方 |
| 2) 声の大きさや発音の明瞭さ | 5) 聞き手への伝達を意識した話し方 |
| 3) 日本語表現の正確さ／豊かさ | 6) 調査内容に対する考え方の独自性 |

実際の評価では、より具体的な項目設定を行い、3ないしは5段階の段階評定を求めた。加えて、自由記述により「発表の良かった点」「次回改善すべき点」の記入を求めた。

これら記入後の評価は、発表会当日閲覧後に一旦非公開にし、後日その集計に教師からの評価とコメントを加えて、Moodleにて個別にフィードバックを行った。

短い準備期間であったにも拘わらず、学生が作成・提示した発表資料は、非常に内容が濃く、画面構成等も工夫されたものが多かった。発表時には、提示のタイミングや強調等、効果的な伝達方法を意識したものが多々見られた。全員が発表内容として指示された6項目を網羅し、ほぼ制限時間内に話し終えた。発表後の質疑応答も活発で、テーマの近い者が、自身の調査経験から質問を投げかけ、やり取りする場面も見られた。

5. インタビュー調査プロジェクト実施後の学生自身の振り返り

オンライン発表会を終えた学生たちに対して、本プロジェクトへの振り返りをMoodleの「アンケート」機能を利用して行った。以下、公表に同意を得られた回答者6名の結果を

報告する。なお、これには自己評価に関する回答も求めたが、紙幅の都合で割愛する。

5.1 インタビューの実施形態

日本人大学生へのインタビューを、実際にどのような方法で行ったかを5件法で尋ねた。その結果、「自分の知人に電話で」が3名、「オンライン日本語ラーニング・コモنزの学生にZoom/オンラインで」が2名、「自分の知人に対面で」が1名であった。選択肢には「自分の知人にZoom/オンラインで」「その他」も含めたが、これらの選択者はいなかった。なお、いずれの回答も音声会話だけだったのか、あるいはビデオ会話だったのかは確かめておらず不明である。

5.2 インタビュー調査での良かったこと

次に、インタビュー調査をして良かったことを自由記述で尋ねた。結果、a)日本人大学生の考えを理解できるようになったこと、b)直接会話ができたこと、c)コミュニケーション能力の向上、が挙げられた（以下、[] 括弧内は日本語表記の誤りを筆者が訂正したことを示す）。

- a) 「[同]学年の日本人の考えが少しわかりました」「自分とインタビューイが互いに知らなかったことを知ることができた」
- b) 「直接会話できた」「会話の練習ができたこと」
- c) 「コミュニケーション能力が高くなりました」

5.3 インタビュー調査での問題点

逆に「インタビュー調査での問題だったこと/困ったこと」を自由記述で尋ねたところ、a)日本語力の問題と、b)インタビュー方法の問題が挙げられた。

- a) 「対面ではないと、少し聞きづらいです」「話のスピードが時々早すぎ[る]ので、わかりにくい時もあること」「自分の日本語が下手です」
- b) 「自分の質問が良くないこと、バラバラ[な]感じ」

一方で、特に問題なしという回答は2名だった（「あまりなかったです」「特に無かった」）。

5.4 インタビュー調査の実施およびその口頭発表の有益度

今回のインタビュー調査の経験が、自分自身にとってどのくらい有益だったかを4件法で尋ねた。その結果、「有益だった」が4名、「まあまあ有益だった」が2名であった。一方、「あまり有益ではなかった」「有益ではなかった」の選択者はいなかった。

さらに口頭発表の経験に焦点化して、自分自身にどのくらい有益だったかを4件法で尋ねた。その結果、同じく「有益だった」が4名、「まあまあ有益だった」が2名であった。また、「あまり有益ではなかった」と「有益ではなかった」の選択者はいなかった。

5.5 本プロジェクトを通しての問題意識/考えの深まり

本プロジェクトを通して、プラスチック問題に対する自分自身の意識/考え方がどのくらい深まったと思うかを4件法で尋ねた。その結果、「深まったと思う」が5名、「かなり深

まったと思う」が1名であった。一方、「少し深まったと思う」「あまり変わっていないと思う」の選択者はいなかった。

さらに、プラスチック問題に対する現在の自分の考え、あるいは以前とは変化した考えについて自由記述で記入を求めた。下記は、その回答である。

- ・「プラスチックゴミ問題に対する人々の意識が大切である」
- ・「自分が思って[い]たより深刻だったので、全般的に意識が高まった」
- ・「プラスチック問題がますます厳しく[なると思います]」
- ・「教育を進めながら、新たなエネルギーを研究する[べき]」
- ・「できる限り、レジ袋の使用を避けたいと思います」
- ・「使い捨てプラスチック製品の使用の減少[が必要]」

5.6 小括

上記の結果を見ると、本プロジェクトの実践について、オンライン授業という限られた環境で実施されたにも拘わらず、学生たちは有益性を感じ、また自身の問題意識や考え方の深まりを認識できていたことが分かる。

すなわち、オンライン授業において、インタビュー調査やプレゼンテーション等のインタラクティブな活動を取り入れることには意義があり、特にそこで生じる他者や他のコミュニティとのやり取りは、口頭表現能力の向上のみならず、思考や認識にも深い影響を与えていると言えよう。

6. おわりに

以上、本稿では、2020年度後期に開講された日本語科目「上級口頭表現」について、授業の概要、インタビュー調査プロジェクトの概要、オンライン発表会の実施方法を報告した。また、振り返りアンケートの結果から、オンライン授業であっても、学生たちは本プロジェクトを通じた学習・活動内容に有益性を感じ、問題意識や考えの深まりを認識できていたことを示した。このことから、オンライン授業にインタビュー調査やプレゼンテーション等のインタラクティブな活動を取り入れることの意義を示した。

補足ながら、コース終了時の学生の感想からも成長の跡が窺えたのでここに紹介しておく。「発表を準備しながら、私が考えた部分を聞き手の方が理解してくれた時とても嬉しく、印象に残りました。私は他人の前で何かを話すことが苦手ですが、この授業を通じてどのように話し、発表すればいいかについて学習できたと思います。(韓国・Cさん)」「自分がグループで話し合うのが苦手です。メンバー達が優しいが、自分が強情すぎるかなあとよく反省し、違う意見があるときにどうすればいいのかも感じました。この点が成長したと思います。(中国・Oさん)」。これらの記述からも、オンライン授業であっても、他者や他のコミュニティとの関わりの中で学ぶことの意義を読み取ることができよう。

このような実践活動は、CLIL(内容言語統合型学習)の基本原理に通じるものがある(cf. 小林・奥野2019、奥野他2018、渡部他2011)。ただ残念ながら、今回はこの理論的枠組みの中で議論するまでには及ばなかった。今後の課題として深めていきたい。

(鹿嶋恵 かしまめぐみ・熊本大学)

注

1. 「(ひらく 日本の大学)オンライン授業、憤る学生 朝日新聞・河合塾共同調査」朝日新聞朝刊2020年8月5日。
2. 「新型コロナ・ミニ知識＝マスクの使い捨て、プラスチック汚染に拍車 不適切廃棄の恐れ」熊本日日新聞朝刊2020年10月3日。
3. 「地球環境2020＝コロナ、プラごみ削減阻む マスク、医療系など増 対策後退の恐れ」 「マイバッグ 感染リスクに 米、レジ袋禁止 先送り」熊本日日新聞朝刊2020年7月20日。
4. この活動は、熊本大学留学生就職推進室の事業で、留学生と日本人学生の交流活動を通じて相互理解の促進や就活支援を目指すものである。コロナ禍を受けZoomによる同期型オンライン形態に変更実施されていた。

謝辞

本プロジェクトの実施にあたり、熊本大学留学生就職推進室「日本語ラーニング・コミュニティ（日本語交流教室）」担当の宮本茂生先生、ならびに日本人学生グループの皆さんには大変お世話になりました。深く感謝申し上げます。また、本稿をまとめるに際し、貴重なご指導ご助言をいただいたアドバイザーの先生にも厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 奥野由紀子・小林明子・佐藤礼子・元田静・渡辺倫子（2018）『日本語教師のためのCLIL（内容言語統合型学習）入門』凡人社
- 小林明子・奥野由紀子（2019）「内容言語統合型学習（CLIL）の実践と効果 ―日本語教育への導入と課題―」『第二言語としての日本語の習得研究』22, 29-43.
- 渡部良典・池田真・和泉伸一（2011）『CLIL内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たななる挑戦 第I巻 原理と方法』上智大学出版